

# 「競争」から「共創」へ

東洋大学経営学部 非常勤講師

玉川大学 教師教育リサーチセンター 非常勤講師

千葉吉裕

東京2020オリンピック・パラリンピックが閉幕した。熱戦に心を動かされ、感動の涙を流したり、元氣や勇気をもたらしたりした人がたくさんいたことだろう。コロナ禍という非常事態の中、アスリートをはじめ関係者には想像もできないほどの苦労があったことと思う。そして、大会開催という公約を果たせたことは、国家としての信頼性の維持・強化につながり、多大な利益をもたらしたと考えている。東京への誘致から、開催まで関わった方々を労いたい気持ちでいっぱいだ。

近代オリンピックは第一次世界大戦前の1896年アテネで第1回大会が開催された。一方、パラリンピックは、第二次世界大戦で脊髄に損傷を負った兵士の治療にスポーツを取り入れたことが始まりとされている。

オリンピックもパラリンピックも、国民国家が形成されていく時代の象徴的なイベントである。開会式では、天皇陛下をはじめ、各国の首相や大統領等、国を代表する方々が臨席し、選手入場は国ごとに行われる。そして、表彰式では、金・銀・銅のメダリストの国旗が掲げられ、金メダリストの国歌が演奏される。そして、当たり前のように自国の選手を応援する。メディアは獲得したメダル数を国別に表示。国家間で争われる競技大会はスポーツの祭典にとどまらない意義深い国際的なイベントである。

その近代オリンピックに、今回新種目として「スケートボード」が登場し

た。若者の五輪離れへの危機感から、追加種目に選ばれたそうだ。女子パークでは、四十住(よそずみ)選手が金メダルを、開心(ひらきこころ)選手が銀メダルを獲得した。銅メダルは、母親が日本人のイギリス代表のスカイブラウン選手が獲得した。そして、開選手は日本の、スカイブラウン選手はイギリスの、史上最年少メダリストとなった。若い選手が活躍する競技で、大会の様子、インタビューに、時代の大きな転換を感じた。

競技を終えると、難しい技を成功させた選手に駆け寄り喜びを分かち合い、また、高度な技に果敢に挑戦し失敗し落胆する選手にも駆け寄り励まし合う。国を背負って競い合うライバルという感じではまったくない。得点を計算して、無難に技をこなそうという態度も見受けられない。難しい技を盛り込み、自分らしいスケートを披露することで、互いの絆が深められているように感じた。ストリートカルチャーとして広まったスケートボードは、新日本スポーツ連盟や全国中学校体育連盟・全国高等学校体育連盟などの組織が運営母体の競技とは異なり、新鮮な魅力を感じた。

もうすでに、時代は令和。遠く離れた昭和を思い起こせば、「戦争」「競争」と他をライバル視し、争うことが時代の風潮だった。そして今、インターネットとスマートフォンを活用すれば、容易に情報を収集でき、しかも高度な専門的な知識までも、いつでも、どこでも、誰でも得られる時代になった。

かつては高度で専門的な知識を備えていることで競争に打ち勝つことができたが、今その優位性が失われようとしている。互いに情報をシェアする関係性が重要になってきているのだ。他を差し置いて自分だけが競い勝とうとするのではなく、他者とのコラボレーションを積極的に行うことで新たな価値を生むオープンシェアという考えが顕在化しており、スピード感をもって全体が発展するために、多様な他者と対話しながら共に新たな価値を創造する「共創(Co-Creation)」がビジネスや教育に求められている。

スケートボード女子パークに、「共創」の事例を垣間見ることができた。新しい技を生み出しても、すぐに真似される。しかし、他者の真似をしていただけでは評価されない。技を隠すのではなく披露し、披露された技を互いに観察しながら、自分らしさを追求していく。その結果、スケートボード界全体のレベルが引き上げられるとともに、独自性のあるスケートを生み出すことができる。競争に勝ったという証の金メダルよりも、自分らしさを大切にしている今日の価値観を感じた。

年末恒例の紅白歌合戦で、男と女の二項対立で争っている構図が、時代に合わなくなっているように感じるのと同じように、国別で争っているオリンピック・パラリンピックも古い価値観に縛られているように感じてしまった。